

41660

教科書文庫

7
810
41-1903
20000 39713

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

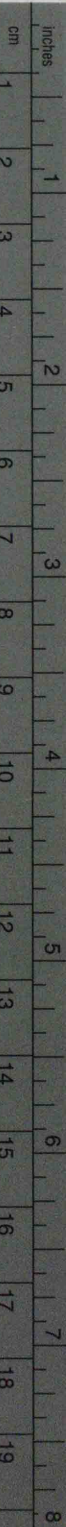


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

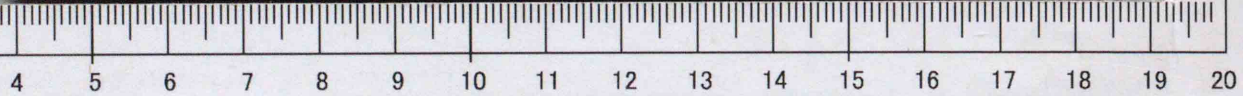
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



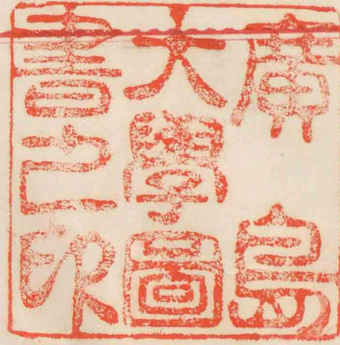
3759
DcB
資料室

訂正
中等國語讀本
落合直文編
卷十



3759
008

資料室



訂正中等國語讀本卷十目次

一、	水無瀨殿その一	一
二、	水無瀨殿その二	八
三、	雁の涙(短歌)	一四
四、	觀月の詞二章	二七
	一、川の月	一七
	二、江の月	一九
五、	融その一	二四
六、	融その二	二八
七、	春夏秋冬四章	三三
	一、雨後の花	三三

訂正中等國語讀本卷十目次

二、月前納涼……………三七

三、秋雨……………四一

四、雪中眺望……………四四

八、いさよふ月……………四七

九、父島母島(長歌)……………五一

一〇、紅蓮尼……………五二

一一、日野山の閑居……………五七

一二、鹿野山に登る記……………六四

一三、山路の物語……………六九

一四、諷諭二則……………七八

一、石清水詣……………七八

二、獅子狛犬……………七九

一五、王づさ四篇……………八〇

一、小澤蘆庵主のもとに……………八〇

二、人のもとより氷をれくれるに……………八一

三、月の夜友のもとに……………八二

四、雪の朝友のもとに……………八三

一六、庭萩(長歌)……………八五

一七、祭のことば……………八八

一八、はれぬ雲(短歌)……………九二

一九、新島守その一……………九六

二〇、新島守その二……………一〇三

二一、新島守その三……………一一二

卷十目次終



訂正中等國語讀本卷十

一、水無瀬殿その一

建久九年正月十一日、第一の御子、土御門院四になり給ふに、御位譲り申させ給ひて、れりる給ふ。御年十九、位にはしますこと、十五年なりき。けふあすは、たちばかりの御齡にて、いと、まだしかるべき御事なれども、よろづ、所せき御ありさまより、は、なかなか、やすらかに、御幸など、御心のまゝならむとにや。世をまろしめす事は、今もかはらねば、いと、めでたし。

鳥羽殿、白河殿なども、修理せさせ給ひて、常に、渡りすませ

給へど、なほ、また、水無瀬といふところに、えもいはず、れもし
ろき院づくりして、まばまば、かよひれはしましつゝ、春秋の
花紅葉につけても、御心ゆくかぎり、世をひゞかして、あそび
をのみぞま給ふ。所がらも、はるばると、川にのぞめる眺望、い
と、れもしろくなむ。元久の頃、詩に、歌を合せられしも、とりわ
きてこそは、

見わたせば、山もとかすむ、水無瀬川、

ゆふべは秋と、なにれもひけむ。

かやぶきの廊、渡殿など、はるばると、艶に、をかしう、せさせ給
へり。御前の山より、瀧れとされたる石のたゞずまひ、苔深き
み山木に、枝さしかはしたる庭の小松も、げにげに、千代をこ

めたる霞の洞なり。

今の御門の御諱は、爲仁と申しき。攝政は、院の御時の關白
基通のれとゞ、その後は、後京極殿良ときこえ給ひし、いと、久
しくれはしき。このれとゞは、いみじき歌のひじりにて、院の
うへ、れなじ御心に、和歌の道をぞ、申し行はせ給ひける。文治
の頃、千載集ありしかど、院、いまだ、きびはに、れはしまし、か
ばにや、御製も見えざめるを、當帝位の御程に、また、集めさせ
給ふ。土御門の内のれとゞの二郎君、右衛門督通具といふ人
をはじめにて、有家の三位、定家の中將、家隆、雅經などに、のた
まはせて、昔より今までの歌を、ひろく、集めらる。れのれの奉
れる歌を、院の御前にて、みづから、みかきとゞのへさせ給ふ

さまいとめづらしく、れもしろし。この時も、さきに聞えつる
攝政殿まよふとりもちて、行はせ給ふ。

れほかた、いにしへ、奈良の御門の御代に、はじめて、左大臣
橘の朝臣、勅をうけたまはりて、萬葉集を撰びしよりこのか
た、延喜のひじりの御時の古今集、友則、貫之、躬恒、忠岑、天曆の
かしこかりし御代にも、一條攝政殿謙徳いまだ、藏人の少將
など聞えける頃、和歌所の別當とかやにて、梨壺の五人にれ
ほせられて、後撰集は、集められけるとぞ。ひがぎきにや侍ら
む。その後、拾遺集は、花山法皇のみづから、撰ばせ給へるとぞ。
白河院位の御時は、後拾遺集、通俊トシトシ治部卿うけたまはる。崇徳
院の訶花集は、顯輔三位、えらぶ。また、白河院れりゐさせ給ひ

てのち、金葉集、かさねて、俊頼の朝臣にれほせて、撰ばせ給ふ。
はじめ奏したりけるに、輔仁の親王の御なりのを書きたる、
わろしとて、なほされ、また、奉れるにも、何事とかやありて、三
度奏してこそ、をさまりにけれ。かやうのためしも、れのづか
らの御事なり。れしなべて、撰者のまゝにて侍るなれど、こた
みは、院のうへみづから、和歌の浦にれりたち、あさらせ給へ
ば、まことに、心ことなるべし。

この撰集よりさきに、千五百番の歌合せさせ給ひしにも、
すぐれたるかぎりを、撰ばせ給ひて、その道のひじりたち、判
じたるに、やがて、院もくは、らせ給ひながら、なほ、このなみ
には、たちれよびがたしと、ひげさせ給ひて、判あつまつのことばを

ば、志るされず、御歌にて、まさり劣れる志ばかりを、あらはし給へり。なかなか、いと、艶に侍りにけり。

上の、その道を得給へれば、下も、れのづから、時を知るならひにや、男も、女も、この御代にあたりて、よき歌よみ、れほく、聞え侍りし中に、宮内卿の君といひしは、村上の御門の御後に、俊房の左のれと、と聞えし人の御末なれば、はやうは、あて人なれど、つかさ淺くて、うち續き、四位ばかりにてうせにし人の子なり。まだ、いと、若きよはひにて、そこひなく、深き心ばへをのみよみしこそ、いと、ありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の時、院のうへ、のたまふやう、こたみは、皆、世にゆりたる、ふるき道のものどもなり。宮内卿は、まだしかるべけれ

且年々人ナラマハナシ
人ナラマハナシ

マカシ

けしき、サレワカエハナシ
用事、マカシ

ども、けしうはあらずと見ゆめればなむ。かまへて、まるがれもてれこそすばかり、よき歌つかうまつれと、れほせらるゝに、れもて、うち赤めて、涙ぐみて候ひけるけしき、かぎりなきすきのほども、あはれにぞ見えける。さて、その御百首の歌、いづれも、とりどりなる中に、

うすくこき、野邊の緑の、若草に、

あとまで見ゆる、雪のむらぎえ。

草のみどりの、こきうすき色にて、去年のふる雪の、遅く、とく、消えけるほどを、推しはかりたる心ばへなど、まだしからむ人は、いと、思ひよりがたくや。この人、年つもるまで、あらましかば、げに、いかばかり、目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若

ま

く、失せにし、いと、いとほしく、あたらしくなむ。
かくて、この度、撰ばれたるをば、新古今といふなり。元久二
年三月二十六日、竟宴といふ事、春日殿にて、行はせ給ふ。いみ
じき世のひゞきなり。

二、水無瀬殿 その二

かくて、院のうへは、ともすれば、水無瀬殿にのみ渡らせ給
ひて、琴笛の音につけ、花もみぢのをりをりにふれて、よろづ
のあそびわざをのみつくしつゝ、御心ゆくさまにて、過させ
給ふ。まことに、よろづ世もつきすまじき御世のさかえ、つき
つぎ、今より、いと、たのもしげにぞ、見えさせ給ふ。

御碁うたせ給ふついでに、若き殿上人ども召して、これか
れ、心のひきびきに、いどみ争はせさせ給へば、あるは、小弓、雙
六などいふ事まで、思ひ思ひに、勝負を、さうどきあへるも、い
と、をかしう御覽じて、さまざまの興ある賭物ども、とうでさ
せ給ふとて、なにがしの中將を、御使にて、修明門院の御方へ、
「何にても、をのこどもに、賜はせぬべからむ賭物」と、申させ給
ひたるに、とりあへず、小き唐櫃の、金物志たるが、いと、重らか
なるを、參らせられたり。この御使のうへ人、何ならむと、いと、
いぶかしくて、片端ほのあけて見るに、錢なり。いと、心えずな
りて、さと、れもてうちあかめて、あさましと思へる氣色志る
きを、院御覽じれこせて、「朝臣こそ、むげに、口惜しくはありけ

れ。かばかりの事知らぬやうやはある。いにしへより、殿上の賭弓といふ事には、これをこそ、かけ物にはせしか。されば、今、かけものと聞えたるに、これをしも、いだされたるなど、いにしへの事知り給へるこそ、いたきわざなれ」とほゝゑみて、のたまふに、さは、あしく思ひけりと、心ち騒ぎて、れほゆべし。

れほかた、この院のうへは、よろづの事に、いたりふかく、御心もはなやかに、物にくはしうぞ、おはしましける。夏の頃、水無瀬殿の釣殿にいでさて給ひて、氷水めして、水飯やうのものなど、わかき上達部、殿上人どもに、たまはせて、大御酒まるるついでにも、『あはれ、いにしへの紫式部こそは、いみじくはありけれ。かの源氏物語にも、ちかき川のあゆ、西川より奉れ

るいしぶしやうのもの、御前にて、調じて」と、かけるなむ、すぐれて、めでたきぞとよ。たゞいま、さやうの料理、つかまつりてむや』などのたまふを、秦の某とかいふ御隨身、高欄のもとちかく侍ひけるが、うけたまはりて、池の汀なる笹を、すこし、去きて、白き米を洗ひて、奉れり。ひろはゞ、消えなむとにや、これも、けしがるわざかな」とて、御衣ぬぎて、かづけさせ給ふ。御かはらけ、たびたび、きこしめす。その道にも、いと、はしたなう、ものし給ふ。何事も、あいぎやうづき、めでたく見えさせ給ふ御ありさま、千とせを經とも、あく世あるまじかめり。

また、清撰の御歌合とて、かぎりなく、みがかせ給ひしも、水無瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議判なれば、人々の心

ち、いとゞ、れきどころなかりけむかし。建保二年九月の頃、す
ぐれたるかぎり、ぬきいで給ふめりしかば、いづれか、れるか
ならむ。中にも、いみじかりし事は、第七番に、左院の御歌、

あかしがた、浦路はれゆく、朝なぎに、

きりにこぎいる、あまのつりぶね。

と、ありしに、北面の中に、藤原秀能とて、としごろも、この道に
ゆりたるすきものなれば、召し加へらるゝ事、常のことなれ
ど、やんごとなき人々の歌だにも、あるは、一首、二首、三首には
すぎざりしに、この秀能、九首まで召されて、まかも、院の御か
たてにまゐれり。さて、ありつるあまの釣舟の御歌の右に、

契りれきし、山の木の葉の、下もみぢ、

そめしころもに、あきかせぞふく。

と、よめりしは、その身の上にとりて、ながき世のめんぼく、何
かはあらむとぞ、聞き侍りし。昔の躬恒が、御はしのもとに召
されて、ゆみはりとしも、いふ事は、と、奏して、御衣たまはりし
をこそ、いみじきことには、いひ傳ふめれ。また、貫之が家に、九
條のれとゞ、魚袋の歌のかへしとぶらひに、左の師ねはしたりしを
も、道の高名とこそ、世繼には、書きてはべれ。ちかき頃は、西行
法師ぞ、北面のものにて、世にいみじき歌のひじりなりしが、
今の代の秀能は、ほとほと、ふるきにもたちまさりてや侍ら
む。(増鏡)

師
西院の
自六條
夏、これ
之か
之か

三、雁の涙

題志らず

讀人志らず

なきわたる、かりの涙や、れちつらむ。

ものれもふやどの、萩の上の露。

秋立つ日、うへのをのこども、賀茂の河原に、川

せうえう志けるとともに、まかりてよめる。

紀 貫之

川風の涼しくもあるか。うちよする、

浪とゝもにや、あきは立つらむ。

題志らず

讀人志らず

志ら雲に、はねうちかはし、とぶ雁の、

かずさへ見ゆる、あきの夜の月。

是貞のみこの家の歌合の歌、 壬生忠岑

山ざとは、秋こそことに、わびしけれ。

鹿のなくねに、めをさましつゝ。

なが月の、つごもりの日、大井にてよめる。

紀 貫之

夕月夜、をぐらのやまに、なく志かの、

こゑのうちにや、秋はくるらむ。

内侍のかみの、右大將藤原朝臣の四十賀志け

る時に、四季の繪かける、うしろの屏風に、かき

たりける。

凡河内躬恒

すみの江の、松をあき風、ふくからに、

こゑうちそふる、れきつ志ら浪。

題志らず

讀人志らず

われ見ても、ひさしくなりぬ。住吉の、

岸のひめまつ、いくよへぬらむ。

題志らず

讀人志らず

わが庵は、三輪の山もと。こひしくば、

とぶらひきませ。松たてるかど。

題志らず

讀人志らず

風ふけば、れきつ志らなみ、たつた山、

夜半にや君が、ひとりこゆらむ。

(古今和歌集)

四、觀月の詞二章

一、川の月

いつはあれど、照る月の秋のさかり、いつこはあれど、行く水の隅田川に、夕波のふた國かけたる月見むとて、唐大和の文人、絲竹にしも、たへたるをつらねて、浮ぶ事あり。舟は、汐のまにまに、棹ならずして上り、岸は、舟のまにまに、居ながらにしてぞうつる。岸は、はるかに、晴れて、百の臺に、簾をまき、風、まづかに、吹きて、千々の舟の、とばりをうごかせり。これや、この蘆荻を分けつる國にやあるらむ。都鳥に言問ひける川にぞあるらし。時のゆければ、かゝる都にしも、なりにけることを、あ

るは、目によるこび、心に驚き、あるは、酔ひなきして、今をほめ、歌志のびして、古をなむかたらひける。時に、或人のいへらく、『わがみかどに、隅田川てふ川こそ多けれ。うちよする駿河なる、大鳥の出羽なる、この武藏なるは、古の言の葉の集には、下つ總のあはひと、書かれ、後の道行ぶりの日記には、相模の境なり』とぞ、志るしける。いでや、月待つほどのなぐさめに、人々、この事、定め給はむなり』といへば、あるが中に、獨、あげつらふことは、それ、古の集は、後の人の筆を加へたるあり、後の日記は、野らに問ひて、志るすことあれば、よるべきものゝ、なづむべからざるをや。そもそも、蘆荻を分けつらむ、都鳥にことゝひけむ、蘆荻は、人草の志げらむさがにして、鳥の名は、都とな

らむ志るしにぞありけらし。志かあれば、かゝる都のうち、に流るゝ川をしも、絶えせぬ御世の例にも引き、ふりにし名所のよすがに、いふべきなりけり』といひ終ふれば、まちとりて、物の音をわなゝかし、すみ上る月に、うそぶきいでたる、いづれのところにか志かむ。いつの時にかは、忘れまし。すなはち、舟こぞりて、かしこければ、今宵のありさま、述べつくすべし。たゞ、我ひとり、酔ふ。かゝれば、何の心かいはむ。

わたつみの、夕汐のほる、隅田川、

月のそらまで、ふねもゆかなむ。

(賀茂真淵著縣居家集)

二、江の月

秋たけ、霜ふりて、つゞりさせてふ蟲の聲も、いそがはしげなる頃、月見むとて、なにがしの入江に舟をうかべぬ。さるは、いにし八月の頃と、思ひたちしかど、ことまげくして、なにくれと、たゆたふほど、長月のかげ、有明になりなむとするに、今日しも、夕つかたより、時雨の雲、残りなく晴れて、寢待の月、きらめきいでぬ。ゆくりなく、いで立たむも、あわたゞしきやうなれど、隈なき光に催されて、思ひたちたるなりけり。いざなふべき友を、たれかれと思ひめぐらすに、なまじひに、れどろかして、夜更けぬ、道遠しなど、つぶやき、まぶまぶならば、口をしからまし。よしや、ひとり、ものせむには、まかじとて、例の瓢ばかりを、れくれぬ友にて、たちいづまづ、心あての、船長をれ

どろかすに、寝れびれたる聲して、帯ないがしろに、引きまといつゝ、いで來ぬ。をりしもこそあれ、かゝる夜寒に、宵すごして、れはしましつることよと、いふれも、ち、すさまじげなるものから、腰のひさごの大なるに、目をやとゞめけむ、舟よそひして、漕ぎいでぬ。水のほとり、秋さび、人げすくなく、まして、夜さへ更けたれば、ものすごしなど、いはむも、なかなかなり。蘆の葉を吹く風は、雪よりもけに、ちりみだれ、月のひかりは、白銀をまきたらむやうに、浪の上に、きらめきたり。まづ、かの瓢をとり出でて、舟長に杯とらするほど、舟は、浪のまにまに、流れ行くめり。いでや、かうやうのをりに、月見るこそ、まことの風流とはいはめなど、聞きも知らぬ船長に、うちかたらひ

つゝ、

水馴棹、さしていでずば、浪の上に、

ひとりや月のすみあかさまし。

と、ほこりがに、うそぶくほど、かたへの蘆原に、聲ありて、

すみ渡る、月の御舟の、ともぶねに、

舟かこる

こぎれくれたる、人もありけり。

と、いふに、むくつけきまゝ、眼をれほきになして、そこら、見め

ぐらせば、小船一艘、月のまへに、漕ぎ出でたり。誰ならむと、さ

しよせて見れば、先に、いざなはゞやと思ひし、友になむあり

ける。れどろきて、なぞ、かく、ひとりは」と、問ふに、「さりや、先に、そ

この従者の、酒買ふとて、瓢うちかたげて、はしり行くにあひ

天海舟 雨ふる舟立
月船日世林三舟
橋陰竹見
人鹿

依止

て、いかなる客人ありてか、いそがはしげなると、問ひしに、「客

人は、さぶらははず。わが殿、今しも、なにがしの入江に、月見にな

むれば、しますなる。かゝる夜寒に、いと、ものぐるほしきこと

とて、行き過ぎぬ。さては、さきつ頃思ひたゝれぬと聞きしは、

今宵なりけりと、思ふに、れくらかされぬこそ、ねたましけ

れ。いで、とくとく、杯を」と、いふに、せんぜられぬるは、ねたきも

のから、うれしくて、船長に、むやひせさせて、かたみに、船端に

れしかゝりつゝ、酒汲みかはし、やうやう、酔のくはゝりもて

行きて、酒あれども、肴なし。月白く、風清しなど、舷を叩きて、う

ちあげ、歌ふほど、村雲、はしたなく、れほひかゝりて、時雨あわ

たゝしう、うちそゝぎ、風さへくはゝりたれば、むやひの綱手

も、れのづから、ひきはなれて、こぎわかれぬ。はては、いかゞなりにけむ。野矢常方著 鬱園集

五、融 その一

「これは、東國方より出でたる僧にて候ふ。われ、未だ都を見ず候ふほどに、このたび、思ひたち、都に上り候ふ。思ひたつ心ぞ、まるべ、雲を分け、舟路を渡り、山を越え、千里も同じ、ひと足に、夕をかさね、朝ごとの、宿のなごりも、かさなりて、都にはやく、着きにけり。いそぎ候ふほどに、これは、はや、都に着きて候ふ。まばらく休らひ、一見せばやと、思ひ候ふ。

「月もはや、出汐になりて、鹽竈の、うらさび渡る氣色かな。陸

奥は、いづくはあれど、鹽竈の、うらみて渡る、老が身の、よるべもいさや、定めなき。心も澄める、水の面に、照る月なみを、數ふれば、今宵ぞ秋の、最中なる。げにや移せば、鹽竈の、月も都の、最中かな。秋は半、身は既に、老い重りて、もろ白髮、雪とのみ、積りぞ來ぬる、年月の、春を迎へ、秋を添へ、まぐる、松の、風までも、わが身の上と、汲みて知る、汐馴衣、袖寒き、浦わの秋の、夕かな。

「いかに、これなる尉殿、御身は、このあたりの人か。さん候ふ。この處の汐汲にて候ふ。不思議や、こゝは、海邊にてもなきに、汐汲とは誤りたるか。尉殿、あら、何ともなや。さて、こゝをば、いづくとまろし召されて候ふぞ。この處をば、六條河原の院とこそ、承りて候へ。河原の院こそ、鹽竈の浦候ふよ。融の大臣、み

ちのくの千賀の鹽竈を、都の内に移されたる海邊なれば、名に流れたる河原の院の、河水をも汲め、池水をも汲め、この鹽竈の浦人なれば、汐汲と、などれほさぬぞや。げにげに、みちのくの千賀の鹽竈を、都の内に移されたること、承り及び候ふ。さては、あれなるは、籬が島候ふか。さん候ふ。あれこそ、籬が島候ふよ。融の大臣、常は、御舟を寄せられ、御酒宴の遊舞さまざまなりし所ぞかし。や、月こそ出でて候へ。げにげに、月の出でて候ふぞや。あの籬が島の森の梢に、鳥の宿し囀りて、詩文うたにうつる月影までも、孤舟に歸る身の上かと、思ひ出でられて候ふ。何と、たゞ今の面前のけしきが、御僧の御身に知らるゝとは、もしも、賈島がことばやらむ。鳥は宿す池中の樹、僧は敲

く月下の門、推すも、敲くも、古人の心。今、目前の秋暮にあり。げにや、いにしへも、月にはちがの、鹽竈の、浦わの秋も、半にて、松風も、たつなりや。霧の籬の、島がくれ、いざ、われも、たちわたり、昔の跡を、みちのくの、千賀の浦わを、ながめむや。千賀の浦わを、ながめむ。

「鹽竈の浦を、都の内に移されたるいはれ、御物語り候へ。嗟、峨天皇の御宇に、融の大臣、みちのくの千賀の鹽竈の眺望を、きこしめし、れよばせ給ひ、この處に、鹽竈を移し、あの難波の御津の浦よりも、日ごとに、汐を汲ませ、こゝにて、鹽を焼かせつゝ、一生御遊のたよりと志給ふ。然れども、その後は、相續して翫ぶ人もなければ、浦は、そのまゝ、干汐となつて、池邊によ

どむ溜水は雨ののこりのふるき江に、れち葉ちり浮く、松か
 げの月だにすまで、秋風の音のみのこるばかりなり。されば、
 歌にも「君まさで、烟絶えにし、鹽竈のうらさびしくも、見えわ
 たるかな」と貫之も、ながめて候ふ。げにや、ながむれば、月のみ
 満てる、鹽竈のうらさびしくも、荒れはつる、あとの世までも、
 志ほ志みて、老の波も、歸るやらむ。あらむかし戀しや、戀しや
 と、慕へども、歎けども、かひもなきさの、浦千鳥、音をのみ鳴く、
 ばかりなり。

六、融 その二

「いかに、尉殿、見えわたりたる山々は、皆、名所にてぞ候ふら

む。御教へ候へ。」さん候ふ。皆、名所にて候ふ。御たづね候へ。教へ
 申し候ふべし。まづ、あれに見えたるは、音羽山候ふか。さん候
 ふ。あれこそ、音羽山候ふよ。音羽山、音に聞きつゝ、あふ阪の、關
 のこなたに（おとこらふ、わぶ）とよみたれば、逢阪山も、程近うこそ候ふらめ。仰
 の如く、關のこなたにとよみたれども、かなたにあたれば、逢
 阪の山は、音羽の峰にかくれて、この邊よりは、見えぬなり。さ
 てさて、音羽の峯つゞき、次第次第の山なみの、名所名所を、語
 り給へ。語りもつくさじ、ことのはの、歌の中山清閑寺、今熊野
 とは、あれぞかし。さて、その末につゞきたる、里ひとむらの、森
 の木立、それをみるべに、御覽ぜよ。まだきまぐれの、秋なれば、
 紅葉も青き、稻荷山、風もくれゆく、雲のはの、梢も青き、秋の色。

「今こそ秋よ、名にしれふ、春は花見し、藤の森、緑の空も、かげ青き野山につゞく、里はいかに。あれこそ、夕されば、野邊の秋風、身にまみりて、うづら鳴くなる、深草山よ、木幡山、伏見野、竹田、淀鳥羽も見えたりや。」

「ながめやる、そなたの空は、まら雲の、はやくれそむる遠山の、峰もこぶかく見えたるは、いかなる所なるやらむ。あれこそ、大原や、小鹽の山も、けふこそは、御覽じそめつらめ。なほなほ、聞はせ給へや。聞くにつけても、秋の風、吹く方なれや、峰つづき、西に見ゆるは、いづくぞ。秋もはや、半ふけゆく、松の尾の、嵐山も見えたり。嵐ふけゆく、秋の夜の、空すみ上る、月影に、さす汐時も、はや過ぎて、ひまもれし照る月にめで、興に乗じて、

「身をばげに、忘れたり。秋の夜の、長物語、よしなや、まづいざや、汐を汲まむとて、持つや、田子の浦、東からげの、汐衣、汲めば月をも、袖にもちまほの、汀にかへる、波のよるの、老人と見えつるが、汐ぐもりに、かきまぎれて、あとも見えず、なりにけり。あとも見えず、なりにけり。」

「磯枕、苔の衣を、かたまきて、岩根の床に、夜もすがら、なほも奇特を見るやとて、夢まち顔の、旅寐かな。」

「忘れて年を経しものを、又いにしへにかへる波の、みつまほがまの、浦人の、こよひの月を、みちのくの、千賀の浦わも、遠き世に、その名を残す、まうちぎみ、融の大臣とは、わがことなり。われ、鹽竈の浦に、心を寄せ、あの籬が島の、松かげに、明月に、

舟を浮べ、月宮殿の、白衣の袖も、三五夜中の、新月の色、千重ふ
るや、雪をめぐらす、雲の袖、さすや、桂の、枝々に、光を花と、ちら
すよそひ、こゝにも名に立つ、白河の波の、あられも、まろや、曲
水の盃、うけたり、うけたり、遊舞の袖。

「あられもまろの遊樂や、そも、明月のその中に、まだ、はつ月
の、よひよひに、影も姿も、少きは、いかなるいはれなるらむ。そ
れは、西岫に、入日の未だ、近ければ、その影にかくさるゝ、たと
へば、月のある夜は、星の薄きが如くなり。青陽の春のはじめ
には、かすむ夕の遠山、黛の色にみか月の、影を舟にもたとへ
たり。又、水中の遊魚は、鈎と疑ふ。雲上の飛鳥は、弓の影とも驚
く。一輪も降らず、萬水も昇らず。鳥は、池邊の樹に宿し、魚は、月

下の波に伏す。聞くともあかじ、秋の夜の、鳥も鳴き、鐘も聞え
て、月もはや、影傾きて、あけ方の、雲となり、雨となる、この光陰
にさそはれて、月の都に入り給ふよそひ、あられなごりをしの
面影や、なごり惜しの面影。謡曲集

七、春夏秋冬四章

一、雨後の花

今日は、いと、のどかなり。いでや、隅田河原の花みむと、小船
に乗りて、行きたるが、花見むと、たち出づるもろ人のさまげ
に、都のみやびを盡せり。さまざまの心々に、うちむきて行く
に、女房なども、なにか、口たゝきつゝ、心そらに、ありくもあり。

馬馳せて花をも、目にかけずいとばうぞくに、行くもあり。やごとなき人にや、人々、うちかこみて、つゝましげに、行く女もあり。あるは、木陰にて、はや、ひさごかたぶけ、なにやらむ、矢立いだし、かいつけ、かうよりして、花の枝につけて、われはがほなる風情なるもあり。今日は、げに、はれにはれて、一天に、雲なく、富士も、筑波も、手にとるばかりに、見えたれど、それを、うち眺むる人もなし。まして、かく、晴れたる日は、とみに、雨風のあなるなどいふことは、露、思ふものもあらじかしなど、思ひて、四方を、ふと、うち見れば、筑波根のあたり、いと、細く、ひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ、世にいふ、はやてなどいふものなりけり。あまりに、朝よりめづらしく晴れたる日なればと

て、かねて、蓑も笠も放たて居しが、はや、櫓を志たて漕ぎかへるを、いかに、この花を見すて、かへるは、かりがねに、つらさやならへる。櫓の音ばかり、學べよかしなど、口々に笑ふを、耳にも入れて、漕ぎ去りぬ。いつか、その雲の、いと、ひろごりてけるが、かのともがらは、露も知らず、日のかげるふも知らず、今日は、あつきばかりなりとて、肌ぬぐもあり。又は、衣などぬぎて、はせありくもありぬべし。雨にさきだつ風の、一とほり、吹き落ちたれば、こは、花よと思ふほどもなく、いさご吹きたてたれば、たゞ、驚きて居るがうちに、雨のふりいでたり。はじめは、こゝちよき雨などとも、いひたらむが、後には、人の聲に、雨の音もせず、馬を馳せて、歸るもあれば、驚きあわて、堤より

まるびて、落つるもあり。女などは、いといたう、みぐるしきま
で、あわてふためきて、はじめ装ひしをも、みづから、夢とや思
ふらむさまなるまして、酒に酔ひて、ぬるゝも志らずがほに、
笑ひなどするもあれば、思ひよらぬれるかなる雨かなと、怒
り罵るもあり。ほかの船は、早く、漕ぎ行きぬれど、わが住む浦
は、遠ければ、とある橋の下に、船とめて居しが、橋の上など、人
の走り騒ぐは、なる神のやうに聞えぬ。はや、雨もかぞふるば
かりに、川の面に見ゆるころ、夕月の、ことさらに、あたらしく
みがき出でたれば、はや、雨のなごりもなし。堤の花、いかゞあ
らむと、漕ぎ返して見れば、その頃は、はや、人もなし。櫻の木
間に、ほのぼのと、月の見えたるは、わがために、つくりなしけ

むと思ふばかりなり。ぬれにし人は、いかゞまたりけむ、この
月などは、思ひもよらであらむなど、ひとり思ふも、何となく、
心れごりゆきぬ。かぞいるも、われひとり、人にこえて、心地よ
しと思ふ時は、と、戒め給ひたれば、また、あやまちまぬべくと、
れそろしく覺えければ、飲み残したる酒携へて、つひに、漕ぎ
かへりぬ。(松平定信著花月草紙)

二、月前納涼

みな月の廿日のほど、れほかたも、この頃は、あつさ、と、ころ
せきほどなるを、まいて、朝より、塵ばかりも、くもりなく、照り
はたゝく日影の、西日になるほど、よに、堪へがたくて、思ふど
ち、うちとけたる物語を、だにして、まぎらはさばやと思ひて、

むつましく、あひ語らふ友だちのもとに、ものしつなきほどにやあらむと、れぼつかなく、思ひしも去るく、今日は、ものへなむまかりぬると、いふに、いと、口をしくて、歸りなむとするほど、この主人、かへり來て、まづ、見るより、今日のおつさを、かへすがへす、いひつゞけ、汗、れしのごひ、扇、うちならしつゝ、ともなひ入る。南、れもてなるところ、伊豫簾、かけわたし、あたりあたり、いと、さはらかに、去つらひたる、いと、涼しげなるに、夕風、待ちとるべきは、しつかたに、つい居たるに、かつがつ、あつさも忘るゝ、心ちして、簀子のはしに出でて、見いだせば、庭の梢ども、いづれとなく、去げりあひたるものから、木立、うとましからぬほどに、つくるひなして、このも、かのもに、はかなき

柴垣、なつかしく、ゆひ渡しなど、去めやかに、見どころあるさまなり。夕つけゆくほど、軒近く、吳竹の下風、心もとなきほどに、うちそよめきたるも、あかぬこゝちのみぞせらるゝ。さうざうしかりつるに、いと、嬉しくて、はかなき物語、いま一きは、心ゆくこゝちす。心へだてぬどちのまと、ぬは、なべて、うちとけたるなむよきを、まして、かく、あつきには、いかでか、かしこまりも、れきあへ侍らむ。無禮の罪は、ゆるされなむとて、なほなほ、帯なども、ときちらしぬべし。主人、なさけある人にて、庭のたて石などに、水そゝがせたる、名残、れぼえて、木々の下枝うちなびき、落つる雫も、いひ去らず、涼しく見ゆ。やうやう、内外くらくなり行くに、さゝやかなる童の出で來て、燈火、近く

ともせば、いでや、けぢかくて、いとあつかはし。今宵は、燈籠にてありなむ。この火、けちてよと、いふ。げに、さも侍らむとて、たちて、去りぬる程もなく、前裁のまげみにたてるに、火入れたる、ほのかなる影に、青葉の露、きらきらと見えて、同じく吹く風も、ことに、涼しくぞれほゆる。夏なつの月なきほどは、庭のひかりなき、いとむつかしく、ねほつかなきものなるを、この光なからましかば、いと、物のほえなからましをとて、皆人、めであへるに、主人の、またりがほなるも、ことわりなりかし。かくて、よひ過ぐるほど、木高き松に、ほのめく影は、月出でたるならむとて、東の妻戸、れしひらきて、待つほど、とばかりありて、いと、はなやかに、さし出でたるは、又、似る物なく、涼しくれもま

ろく、燈籠の光も、今ぞ、むとくに消たれにたる。風さへ、いと、ひややかに、うち吹きたるは、ふる川のべの杉の下陰かげならねども、秋あきやかへりて、など、うちずしの、しる。大かた、月は、秋をこそめでたき時に、古より、いひれきためれど、この頃の空に、かくて、待ち出でたるほどよ、たとしへなく、心もすみて、物むつかしさも、こよなく、まぎるゝわざになむ。本居宣長著鈴の屋集

三、 秋雨

八月二十日あまり、秋のけはひのなつかしくして、例の隅田川のほとり、石濱の庵に行きて、宿りぬ。有明の月の匂も、霧立ちわたる曙のさまも、ところから、世にも似ぬものから、ここは、雨のそほ降る日なむ、ことに、あはれ深かりける。もとよ

り、茅葺ける庵なれば、音だになくて、軒の雫のみつよつ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色づきたるが、ほろほるとちるも、あはれなり。水の面は、動くともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃き薄きうつろひて、かつ浮び、かつ消ゆるみなわにこそ、雨のけはひは、志るかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらはで、とはに、花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや、水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。打ち向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如くなるが中には、はゝその黄ばみたるは、さすがに、ほのかに見えて、そのひまびまより、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やうやうに、淡墨もて、かきけちたらむが如く、いとしも遙けきは、たゞ、なびか

淡墨
濁り

ぬ烟とのみぞ見ゆる。こゝかしこより、鳥の飛び行きつゝ、埒の鷺の、翹れもげに起き出で、河の瀬のまこもに、下り立てば、みさごの群れきて、水の雨に浮べるも、をかし。上つ瀬より、筏師の蓑笠着て、棹を筏の上によこたへ、ねのれたむだきて、思ふ事なげにて居り。筏は、水のまにまに、流れゆくも、まづけし。渡守、舟さし、いませば、大笠、かたぶけて、渡り行く人の、やがて、堤をありくありさまも、繪によく似たり。すべて、ひと日のうち、筑波根より、吹きれるすと思へば、沖よりも、風、かよひきて、岸の木立も、長き堤も、あるは、あらはれ、あるは、かくれて、かぎりなき青海原に向ひたらむやうに、覺ゆるをりもありけり。かくて、やゝ、夕暮近くなりゆけば、むら鳥の、ねのがじし、埒

るも、めづらしや。ひとり、思ひあがりて、なずらふべき山のな
 きにぞ、なにがしの嶽とは知らるゝ。心だかくも」とこそは、い
 はまほしけれ。名たゝる高嶺は、時じくものから、つぎてふり
 志く大雪に、この出で立てる見わたしより、武藏野の大野の
 きはみ、遠白く、麓につゞきて、天には、かかる大傘を、なかば、開
 きたるさまに、さし出でたるが、なほ、めづらしくて、うつら、う
 つら、見つゝ、しをれば、駒の口は、ねさへとゞめながら、心は、空
 になむ行きける。

降る雪に、片ひらきなる、大かさを、

さしてたゞせる、富士の志らやま。

などと、ひとりごちたるほどに、一杯の酒もさめて、すゞる、寒

くなりぬれば、駒ひきむけて、かへりなむとす。〔橋守部家集〕

八、いざよふ月

むかし、壁の中より、もとめでたりけむ、ふみの名をば、今
 の世の人の子は、夢ばかりも、身の上のことゝは、志らざりけ
 りな。みづくきの岡のくず葉、かへすがへすも、かきれくあと、
 たしかなれども、かひなきものは、親のいさめなりけり。また、
 賢王の人をすてたまはぬまつりごとにも、漏れ、忠臣の世を
 れもふなさけにも、すてらるゝものは、かずならぬ身ひとつ
 なりけりと、れもひ志りながら、また、さてしもあらで、なほ、こ
 のうれへこそ、やるかたなく、悲しけれ。

訂正中等國語讀本卷十

四七

白くウツマラス
 テアロー、カン
 ショテオ、ワケン、コカス

山ひとり、思ひあがりて、なずらふべき山のな
 きにぞ、なにがしの嶽とは知らるゝ。心だかくも」とこそは、い
 はまほしけれ。名たゝる高嶺は、時じくものから、つぎてふり
 志く大雪に、この出で立てる見わたしより、武藏野の大野の
 きはみ、遠白く、麓につゞきて、天には、かかる大傘を、なかば、開
 きたるさまに、さし出でたるが、なほ、めづらしくて、うつら、う
 つら、見つゝ、しをれば、駒の口は、ねさへとゞめながら、心は、空
 になむ行きける。

むかし、壁の中より、もとめでたりけむ、ふみの名をば、今
 の世の人の子は、夢ばかりも、身の上のことゝは、志らざりけ
 りな。みづくきの岡のくず葉、かへすがへすも、かきれくあと、
 たしかなれども、かひなきものは、親のいさめなりけり。また、
 賢王の人をすてたまはぬまつりごとにも、漏れ、忠臣の世を
 れもふなさけにも、すてらるゝものは、かずならぬ身ひとつ
 なりけりと、れもひ志りながら、また、さてしもあらで、なほ、こ
 のうれへこそ、やるかたなく、悲しけれ。

かこそを、
 白くウツマラス
 テアロー、カン
 ショテオ、ワケン、コカス

教島三文字の歌

「ウイキ事心カキ、本意
十未歌 トリウ人モア
神樂のことば
あはれ、あな、おし、あな、さや
あふんぬ、し、あな、さや
け、木や草もまらさき」

有難く、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや

細川座
「あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや

あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや
あな、さや、あな、さや、あな、さや

さらに、思ひつゞくれば、やまと歌の道は、たゞ、まことすくなく、あだなるすさびばかりと、れもふ人もやあらむ。日の本の國に、天の岩戸ひらけし時、よもの神たちの、神樂のことばをはじめ、世を治め、物をやはらぐるなかだちとなりけるとぞ、この道のひじりたちは、去るしれかれたりける。さて、また、集をえらぶ人は、ためしれほかれど、二たび、勅をうけて、代々にきこえあげたる家は、たぐひ、なほ、ありがたくやありけむ。そのあとにしも、たづさはりて、三たりのをのこども、も、ちの歌ふる反古どもを、いかなるえにかありけむ、あづかりもたることあれど、道をたすけ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、ふかきちぎりをむすびれかれし、細川のながれも、

ゆゑなく、せきとゞめられしかば、跡とふ法のともし火も、道をまもり、家をたすけむ、親子のいのちも、もろともに、きえをあらそふ年月を経て、あやふく、心ほそきものから、何として、つれなく、今日までには、ながらふらむ。をしからぬ身ひとつは、やすく、思ひすつれども、子を思ふ心のやみは、なほ、忍びがたく、道をかへりみるうらみは、やらむかたなく、さても、なほ、あづまの龜の鏡にうつさば、くもらぬ影もやあらはるゝと、せめて、思ひあまりて、よるづのは、かりを忘れ、身をえうなき物になしはて、ゆくりもなく、いさよふ月に、さそはれいでなむとぞ、思ひなりぬる。
ころは、みふゆたつはじめの、さだめなき空なれば、ふりみ、

ふらずみ、時雨もたえず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に、みだれちりつゝ、事にふれて、心ほそく悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とゞまるべきにもあらで、なにとなく、いそぎ立ちぬ。目も涙もめかれせざりつるほどだに、荒れまさりつる、庭もまがきも、ましてと、見まはされて、志たはしげなる人々の袖の雫も、なぐさめかねたる中にも、侍従、大夫などの、あながちに、うち屈したるさまいと、こゝろぐるしければ、昔の枕さへさまさま、いひこしらへ、昔の枕さへ聞のうちを見れば、昔の枕さへ、さながら、かはらぬを見るにも、今さら、かなしくて、夫枕かたはらにかきつく。

とゞめれく、ふるき枕の塵をだに、

われたちさらば、誰か掃らはむ。

(十六夜日記)

九、父島母島(渡邊重春)

白眞弓、伊豆の國より、
 五百重なみ、千重波へなる、
 ひむがしの、みなみの海に、
 ちゝじまは、ありといふなり、
 はゝじまは、ありときくなり、
 ちゝの實の、父の命を、
 またふがね、かくや名づけし、
 柞葉の、母の命を、

白眞弓
ヨリ去ッ
弓

經つゝ象潟へは、かくとも、告げざりけるに、幾程もなく、娘を送りれこせたり。掃部、うち驚き、「わが子は、はやく、みまかり侍りき。さるを、とく、告げざりし息は、今はた、いかにかせむ。はかなき縁と思ひ、とく、歸りて、更に、良縁をもとめ給へ」といふに、女、うち泣きて、とみに、ものをもえいはず。まばしありて、親々の許しゝ中は、未だ、對面も賜はらぬに、うせ給ひぬとも、猶、妹背とこそ思ひ侍れ。宿世つたなきは、いかにかせむ。今よりは、たゞ、亡靈に仕へ奉り、命終ふるまで、あだし心を思ひ侍らじ」とて、いかに、勸むれども、聽かず。遂に、止り居て、舅姑にも、孝を盡して、まめまめしきこと、たぐひなし。かくまつゝ、年をへて、舅姑も、なくなり、にければ、圓福寺の明極禪師の弟子となり、

頭れるして、名を紅蓮と改め、一向に、法の行のみにて、この世を終へけり。さて、小太郎の幼き時、常に、觀世音の御堂の邊にて、遊び戯れけるに、手づから、梅の一本を植ゑたるがあり。この尼、それを、亡夫の形見と忍びつゝ、その側に、庵して住みけり。ある時、その花の盛なるを見て、かなしみに堪へず、

移し植ゑし、花の主は、はかなきに、

のきばの梅は、咲かずともあれ。

と、詠みけるに、またの年の春、この梅のみ、花咲かざりければ、尼、また、

さけかしな。今は主と、ながむべし。

のきばの梅の、あらむかぎりは、

これより、春ごとに、もとの如く、花咲きけりとなむ。今、その庵を心月庵といふ。軒端の梅といへるは、猶、當時のを作りつぎ、植ゑつぎたるなり。又、その手すさびに作りし煎餅といふもの、後に、その名をれほせて、こうれんといひしが、圓福寺より、歳毎に、國の守に獻る事、恒の例とはなれり。されども、今は、そのうせにし年月も、その墓のありかも、さだかならず。世、いよく、遠く隔りなば、語りつぎ、聞きつぐこともなからむとて、江戸の人、宮下信教、圓福寺の中方禪師に謀りて、石に記して、永く、世に傳へむ事を願ふ。あな、めでたの志や。あな、よろこばしのわざや。(安田光則著光則文集)

一一、日野山の閑居

こゝに、六十の露、消えがたに、れよびて、さらに、末葉のやどりを結べることあり。いはゞ、旅人の、一夜の宿をつくり、老いたる蠶の繭をいとなむが如し。これを、中頃のすみかに、なずらふれば、また、百分が一に、だにもれよばず。とかくいふほどに、齡は、年々に、かたぶき、住家は、折々に、せまし。その家のさま、世の常ならず。廣さは、わづかに、方丈、高さは、七尺ばかりなり。處を思ひさだめざるが故に、地を志めて、つくらず。土居をくみ、打覆をふきて、つぎめごとに、かけがねをかけたなり。もし、心にかなはぬことあらば、やすく、外に移さむがためなり。そのあらためつくる時、いくばくのわづらひかある。積むところ、

わづかに、二輛なり。車の力をむくゆる外は、さらに、他の用途
いらず。

いま、日野山の奥に、跡をかくして後、南に、假の日かくしを
さし出して、竹のすのこを敷き、その西に、閼伽棚を作り、うち
には、西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉りて、落日を
うけて、眉間のひかりとす。かの帳の扉に、普賢ならびに、不動
の像をかけた。北の障子の上に、ちひさき棚をかまへて、黒
き皮籠、三四合を置く。すなはち、和歌、管絃、往生要集ごときの
抄物を入れたり。かたはらに、箏、琵琶、れのれの一張をたつ。い
はゆる折箏、つぎ琵琶、これなり。東にそへて、蕨のほどろを志
き、つかなみを志きて、夜の床とす。東の垣に、窓をあけて、こゝ

に、文机をいませり。枕のかたに、すびつあり。これを、柴折りく
ぶるよすがとす。庵の北に、すこし、地を志めて、あばらなるひ
め垣をかこひて、園とす。すなはち、もろもろの藥草を植ゑた
り。假の庵のありさま、かくのごとし。

その處のさまをいは、南にかけひあり。岩をたゝみて、水
をためたり。林の軒ちかければ、つまぎを拾ふに乏しからず。
名を、外山といふ。正木のかづら、跡をうづめたり。谷志げけれ
ど、西は、晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は、藤浪
を見る。紫雲のごとくして、西方ににほふ。夏は、ほとゝぎすを
聞く。かたらふごとに、死出の山路をちぎる。秋は、ひぐらしの
聲、耳に満てり。空蟬の世をかなしぶと聞ゆ。冬は、雪をあはれ

ぶつもあり消ゆるさま罪障にたとへつべし。もし念佛ものう
く、讀經、まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨
ぐる人もなく、また、恥づべき友もなし。ことさらに、無言をせ
ざれども、ひとり居れば、口業ををさめつべし。かならず、禁戒
を守るとしもなければ、境界なければ、何につけてかやぶ
らむ。もし、跡の白浪に、身をよするあしたには、岡のやに行き
（半信の東山岸）
かふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし、桂の風葉を
（舟の跡）
ならす夕には、潯陽の江をれもひやりて、源都督のながれを
（白樂天の舟の跡）
ならふ。もし、あまりの興あれば、まばまば、松のひゞきに、秋風
の樂をたぐへ、水の音に、流泉の曲をあやつる。藝は、これ、つた
（曲の名）
なけれど、人の耳をよるこばしめむとにもあらず、ひとり志

満沙彌
（舟の跡）
桂の風葉
潯陽の江
源都督
秋風
流泉の曲
松のひゞき

らべ、ひとり詠じて、みづから、心をやしなふばかりなり。
また、ふもとに、一の柴の庵あり。すなはち、この山守が居る
ところなり。かしこに、小童あり。時々來りて、あな訪ふ。もし、つ
れづれなるときは、これを友となして、あそびありく。かれは、
十六歳、われは、六十。その齡、ことの外なれど、心をなぐさむる
ことは、これ、れなじ。あるひは、つばなをぬき、岩なしをとる。又、
ぬかごをもち、芹をつむ。あるひは、すそわの田井にれりて、落
穂を拾ひて、ほぐみを作る。もし、日、うらゝかなれば、嶺によぢ
（山の上）
のほりて、はるかに、故郷の空を望み、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽
東師を見る。勝地は、主なければ、心をなぐさむるに、さはりな
（星雲の地）
し。あゆみ、わづらひなく、志、遠くいたる時は、これより、嶺つゝ

つばな
ぬかご
あゆみ
わづらひなく
志、遠く
いたる
時は、これより、嶺つゝ

日なれば、例の神拜など、志をへて、鳥居岬といふところに、たちいでて見やれば、宵の嵐に、雲霧なごりなう、はらはれて、海山はるばると見わたさる。ねほよそ眼界は、十まり三國にれよべりといふげに、さもあらむかし。北の方に、遠く、空にそびえたるは、常陸の筑波山なり。すこし、左にさりて、雲間に見ゆるは、下野の二荒山なり。また、左に連りたるは、上野の赤城、榛名の山々なり。また、左に、いと、遠く、かすかに見ゆるは、信濃の淺間の嶽なり。また、西に、すこし、近げに見ゆるは、武藏の秩父嶺、多摩の横山なり。それに續きたるは、あふりの山なり。その間に、白う、遠く見ゆるは、甲斐の山々なるべし。さて、足柄、箱根のむら山を、ふもとにして、雲の上に、そりたてるは、富士の

十月三不

百夫利山

高嶺なり。また、南にはなれて、聳えつるは、伊豆の天城山なり。また、左に、海をへだて、烟のたちのぼるは、大島の峰なり。また、まぢかく、安房とこの國との堺を、たちきれるやうなるは、鋸山なり。それにつゞけるむら山は、東にめぐりて、五百重波のたてるが如し。九十九谷を、一目に見れるすなどいへるも、そらごとにあらず。さて、この山々をめぐらしたる中に、平に、開けわたりつる國原は、新しき年の志るしに、たちわたれる。霞の中に見えがく、れして、八國の堺、いと、さだかならねど、あなめでたの國と見えたり。さるに、内海は、いと、大なるますみの鏡を、斜に、引きのべたらむやうなるに、朝日の、くまなく、輝きわたりて、かしこは、横濱、横須賀なるべし。このあたりは、三

伊波王の事、
桶屋の事、
申すべし

浦三崎ならむ。むかひは、走水のわたりにて、観音崎の燈臺も、
手にとるばかりなるに、ゆきかふ大船小船の、眞帆片帆に見
ゆるなど、筆にも、ことばにも、ねよびがたし。あはれ、阪東の八
國や、昔、遠^{スラフ}天皇の詔して、面には、矢はたつとも、背には、矢はた
てじと、言あげして、すめらが朝廷を、まもらふ東人こそと、の
りたまひしも、^後の世までも、つよ弓に、大矢をたぐひ
て、盾も、よろひも、たまるまじう、ふるまへる武夫ら、幾千萬人
かありし。鎌倉將軍が、この輩を撫でやしなひて、天下の兵に
たむかひても、力あまりあり」とこそ、ほこらひたりしか。され
ど、そは、昔の夢なりけり。今は、かけまくも、かしこき天皇の、都
を、東京に定めたまひて、大八洲の國內は、いふもさらなり、遙

けき海の外なる、千よろづの國人も、うちなびき來て、つかへ
まつる御代にしあれば、弓も、劔も、ふくろにをさめて、ひたむ
きに、國も、民も、やすかれと、ねきてさせたまふこと、こゝに、二
十年あまり四年の新代となりぬ。むかしは、武を以て、つかへ
まつりしも、今は、文を以て、いそしむべき時なり。かゝる、遠白
くさやけき、海山を見るにつけても、思ひあがらざらぬや。^{鮮明}
米幹文著水屋集

一三、山路の物語

布教のために、函館の港にまかるべき、ねほせごと蒙りて、
そこにありけるほど、福山なる開拓使の廳より、また、こゝに

もと、いひれこせければ、馬に鞍れきて、函館のやどりを出てたつ。年は明治の六年、時は七月の二日といふ日なりけり。かくて、山をこえ、川をわたり、磯邊を傳ひなどして、行くに、尻内の郷といふ處より、福山の郷までの間に、七里の山ごえあり。その山中には、たゞ、一二軒の家あるよし。げに、木だちは、くらく、山は、ふかく、なやましかる路ながら、駒にまかせて、のぼりゆく。

かくて、三里ばかりも來ぬらむと覺ゆるに、聞きしが如く、草の屋二軒あり。右の方なるは、家居のさま、いと、古く、もとよりに、こゝに住めりと見ゆ。左なるは、近きころ、住みつきたりと覺えて、れるカヤノクそかながらに、もの新しう見ゆ。火をこひて、煙草

経巻、イナシラ、教書、
まある、
一、植、
教、

ものせむと、馬よりれりて、家にいれば、いそぢあまりなる。と、はたちばかりなる女と、二人あり。主人と、ねほしきは、見えず。さて、れのれを見て、かの、経巻、イナシラ、教書、 嫗、いと、も、おや、かに、塵うち掃ひ、上座に、徳下ヤ、レトヤカニ、花を、 蕙敷きて、けいめいしたり。かくて、下についゐて、これに、やすらひ給へ。かゝる深山の奥の伏屋なれば、さこそ、ものむづかしう、ねほしめすらめなど、かひがひしう、火桶の灰、ハコ、 かけやりて、もて出でぬ。はたちばかりなるも、この嫗の、ハコ、 志りへにつきて、いと、やさしげに、額づきぬ。

この家、すべてののさま、たゞならず、家内のものも、深山人とも、ねほえず。いかなる者ならむと、いぶかしさに、かなた、こなた、見めぐらせば、金紋まきたる鞍に、麻繩つけて、薪木れはす

る馬の（引用）に、なしたるさまなり。また、槍一つ、壁にものして、つゞ
 れ衣、うち掛けたり。かの謠曲といふものに見えたる、佐野の
 某が、隱家の心ちして、ゆかしう、おぼえつゝ、まづ、腰より、煙草
 とり出でて、くゆらすに、嫗の、はたちばかりの女に、「きこしめ
 すべくもあらねど、茶、參らせよ」といふを、その女、手をつきて、
 「かしこまりぬ」と、おやび作りて、黒うなりはてたる釜のうち
 より、宇治山の木の芽の汁も、その釜の色にかよひたるを、汲
 み出でて、ものにすゑて、もてきぬ。

すべて、この女、嫗の、ものおぼするごとに、必ず、手をつき、頭
 をたれて、うけたまはるさま、主従とおぼえたり。かく、ある人
 に、從者あらむも、いぶかしく、さてなむ、いよゝ、昔ゆかしきこ

こちして、おのれ、嫗に向ひて、「おのれらは、公事ありて、福山の
 方へ、まかる者なり。なめしかれど、見參らするに、世に後れ給
 ひて、かく、おはしますならむ。そも、そも、いつこ、いかなる人に、
 おはしますらむ。かく申すおのれも、今は、公に仕へて、人がま
 しき身（トイコウケンズクウ）にこそあれ、一度は、いと、うちわびて、おなかずみせ
 し事（トイコウケンズクウ）もあれば、思ひはかり參らせて、心苦しう、おぼえ侍るを
 と、いふを聞きて、嫗の、「たゞ、煙草の火をとて、かう、けがしき伏
 屋のうち、訪はせ給ふだに、忝なう、やさしう侍るを、身のよす
 がなき事さへ、おぼしはかりて、問はせ給ふは、宿世（スカセ）、あやしう
 侍り。今は、何をかつゝみ侍らむ。さきには、世々（ヨセヨセ）、松前氏に仕へ
 て、その家人（ケモノ）の長にもありけるを、近きころ、君に放れ、夫に別

残りて、かう、やつしう、なりはて侍りぬ。わごも、家（カミヤ）にあら
 ば、君等のたち（キミガタチ）よらせ給ふを、さこそ、ほいあることに、思ひ給
 ぶらめ。さきに、山かせぎにとて、出で立ち侍り。かゝりければ、
 なかなか（なかな）に、深山の奥こそと、思ひ入りて、この山もとなる、民
 どものなさけにて、興へられたる、この小屋一つを、つゆのよ
 すがに、住みつき侍り。さるにても、たのみなき身に侍るもの
 から、これなる下女は、津輕のうまれにて、民子と申す者にて
 侍るが、十四の年より、召しつかひて、ことしは、たちになり侍
 り。見給ふ如く、折りたく柴のけぶりには、すゝけ侍れど、みめ
 かたち、けしうもあらず。さるが上に、わらは親子の仰する事、
（おんがら）

いさゝかも、たがふる事なく、心をせめて、仕へ侍るからに、か
 かる身になりし時、いとま、とらせむとて、世を去りし夫が、物
 の底に、いさゝか、残しれきたりし金のうち、三枚ばかりに、衣
 そへて、とらせ侍るを、この女、うち泣きて、こは、何事をか、のた
 まふらむ、十四のとしの春より、身に蒙りたる御惠は、山より
 高うはべるものを、今、かくなり給ふを見捨てまつりては、い
 づこにか、まかるべき。昔のまゝに、れはしまして、御心にかな
 はぬことしもあらば、暇をもたまはり、また、さなくとも、年重
 ねたらむ後は親の許にも、まかりなむを、かう、御心細う、れは
 しますを、なか、うち置き奉らむ。山の奥野の末までも、召し
 具したまへ。薪木こり、馬れひても、御手だすけをば、なしはべ
（おんがら）

らむとて、うけひきはべらず。わらはも、うち泣きて、その志は、
 忘るゝ世もなきまで、嬉しかれども、いま、花にひとしき身を、
 深山木の、色なきものと、なしはてむは、あたらしきわざなら
 ずや。とにも、かくにも、親の許にこそと、申し勸め侍りしを、こ
 の女、うち志をれて、かくまで、申しても、ゆるしたまはずば、こ
 の深谷のそこに、身を投げなむより、せむ方はべらず。花の色
 香も、主の君の、春にあひ給ふ時にこそ、世にも匂はせまほし
 けれ。かくなりはて給ひし上は、白髪を生ふるまで、この深山
 の奥の埋木とならむをとて、思ひさだめて、見え侍れば、今は
 とて、今日まで、かくて、さしれき侍り。われら、親子のはかなさ
 よりも、この女のうへを、あはれとだに見たまへ」と語り出て

て、涙とゞめあへず。

・れのれも、れもほえず、旅の衣の袖志ほりつゝ、いとも、あは
 れに、いとも、めでたきこと、承るものかな。かう、世にありがた
 き人の上、ひろく、人にも聞かせ、世の女の、よき手本にこそ、な
 すべかりけれ。かまへて、かまへて、その志、失ひ給ふな。かゝる
 人を、いかでか、神の守りたまはぬ事あらむ。神の恵に、花さき
 匂はむ春も、必ず、あるべきを、身に志むらむ。朝夕の山風、いと
 ひ給へ」と、慰めて、馬引きよせ、うち乗りけるを、老いたる、若き、
 二人ながら、送りいって、袖をなむ、分ちぬる。布教のためにと
 て、旅路をたどるこの身には、こがねにも、玉にも、まさる、これ
 の山路の物語なりけり。(堀秀成著山路物語)

一四、諷諭二則

一、石清水詣

仁和寺にある法師、年よるまで、石清水を、をがまざりければ、心うく覺えて、ある時、思ひ立ちて、たゞひとり、かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て、歸りにけり。さて、かたへの人にあひて、年ごろ、思ひつること、はたし侍りぬ。聞きしにも過ぎて、たふとくこそ、それはしけれ。そも、まありたる人ごと、に、山へ登りしは、何事かありけむ。ゆかしかりしかど、神へまゐるこそ、ほいなれと思ひて、山までは見ずとぞ、いひける。すこしのことにも、先達は、あらまほしき事な

まゝ

り。徒然草

二、獅子狛犬

丹波に、出雲といふ處あり。大社を遷して、めでたく造れり。志太のなにかしとかや、志る處なれば、秋の頃、聖海上人、その外も、人、あまたさそひて、いざ給へ。出雲をがみに。かいもちひめさせむとて、具しもて、いきたるに、れのれの、拜みて、ゆゝしく、信れこしたり。前なる獅子狛犬、背きて、うしろざまに、立ちたりければ、上人、いみじく、感じて、あな、めでたや、この獅子の立てやう、いと、めづらし。深き故あらむと、涙ぐみて、いかに、殿ばら、殊勝の事は、御覽じとがめずや、無下なりと、いへば、れのれの、怪みて、まことに、他に異りけり。都のつとに、語らむなど、

寺の塔を二つとす
そとよりむかひ

ゆかしきハ、中を知らば、
あつかりし、幻に思はるる
あつかりし、

いふに、上人、猶、ゆかしがりて、れとなしく、物識りぬべき顔志
たる神官を呼びて、この神社の獅子の立てられやう、定めて、
習ある事に侍らむ。承らばや」といはれければ、その事に候ふ。
さがなきわらはべども、つかまつりける、奇怪に候ふ事な
りとして、さし寄りて、据ゑ直して、去にければ、上人の感涙、いた
づらになりけり。徒然草

一五、玉づさ四篇

一、小澤蘆庵主のもとに

◎干さをへたて侍れど、こゝらのとし月、まのあたり、かた
らひかはし侍る心ちせらるゝまゝに、うちつけなるものか
けり、こゝらのとし月、まのあたり、かた
らひかはし侍る心ちせらるゝまゝに、うちつけなるものか

ら、たちかへる春のほぎこと聞え侍り。君もわれも、もゝ世を
へつゝ、花鳥に、あくやあかずや、いざこゝろみむ。ものみなは
とか。む月六日の日、橘千蔭
祝詞 中上ツヨシ
おまへもあつかりしを
おまへもあつかりしを
おまへもあつかりしを

二、人のもとより氷をわくれるに

つちさへ裂くとかいふなるは、暮まつほども、いと、待遠な
るに、折しも、やんごとなきあたりより、わかち給へるなりと
て、暑さ忘れむ料にとて、賜れるは、いと、めづらかになむ。まづ、
手にとり侍るだに、そゝる寒きまで、れほえ侍り。わらはども
は、めでくつがへり侍りて、ひたひにのせ、胸にあてなど、まづ
つ、もて興じ侍るも、をかしうなむ。されど、こは、れほやけのれ
ものにも、供へ侍ると聞くなるを、いぶせき伏屋の、心やりぐ
おまへもあつかりしを
おまへもあつかりしを
おまへもあつかりしを

さになし侍らむは、なかなかにかしこきわざなりや。とまれ
かくまれ、御まのあたりにこそ、よろこびは、聞えつべけれ。
手にとるも、あなめづらしな。あつ氷、

遠きつげ野の、むかしれほえて、

昔、つがひつら、所、
（村田春海）



三、月の夜友のもとに

いざたまへ。もろともに。この月のさやけきを、所せきつづ
のうちにのみやは、見はて侍らむ。なにがしが、なりどころに
まからむ。それも、まらうどなどきあひて、あるじまうけする
程ならば、それがしのかくれがにまからむ。それも、ありきた
がひて、あらぬほどならば、北山の律師の室を驚し侍らむ。そ

傳、
傳、
傳、
傳、
傳、

れも、もし、里にれりたらむほどならば、うしろの山にのぼり
て、夜もすがら、めであかさむを、いざたまへ。もろともに。
なべて世の塵をよそなる、高山の、

松のこずゑの、つきをいざ見む。

そめいろの峯までもこそ。清水瀧臣

四、雪の朝友のもとに

今朝のけしき、めづらしく御覽せずや。冬になるより、いつ
しかとのみ、日毎に、待ちわたり侍りしに、昨日のゆふべ、風、い
たく、吹きあれ、雲のたゞずまひも、いみじく、さえわたりて、飛
ぶ鳥のけしきまで、必ず、降りぬべき空とは見えしかど、いと、
かくまで深くとは、思ひ給へざりきかし。あけくれ、心へだて

蘇、
蘇、
蘇、
蘇、
蘇、

そ、
そ、
そ、
そ、
そ、

ぬ友どちは、かゝらぬをりだに、何事につけても、まづ、思ひ給へ出でらるゝわざなるを、まして、かく、めづらかなる朝ぼらけを、心なき身の、ひとりのみ見侍らむことの、いと、あたらしく思ひ給ふれば、よし、跡つけても、人の訪ひ給はましかば、こよなく、をかしさも、まさりぬべきものをと、思ひ給ふるに、いかにとだに、音づれも、志給はぬは、いと、思はずに、うらめしくなむ。この景色、さりと、も、見過しがたくは、れぼさるらむものをと、思ひやり聞えさすれど、志ろしめすやうに、いと、うひうひしき口には、何事をもいはれ侍らず。筆の志りとる博士だに侍らで、とりつくろひ侍らむやうも侍らねば、思ひ給ふるほどの心も、たゞ、れしこめてなむ。そこには、いかに、見どこ

るある、心ふかき言の葉多く、ものし給ふらむ。一つ二つたまはせよかし。さてなむ、せばき庭の雪の光もくは、りて、友なき今朝のさうざうしさをも、慰め侍らむ。いでや、かく、聞えさするも、もとより、あやしき鳥の跡の、今朝は、いと、筆のさき、志みこほりてはべれば、御覽じわくかたも侍らずや。あなかしこ。(本居宣長)

一六、庭萩 (橘千蔭)

秋 風の、 たちにし日より、
 遠 方の、 野邊の八千くさ、
 咲きみだれ、 蟲の音きそひ、

れいこあしむむ、
 腹ニ入レテモニホス
 文章ニホス又、く。
 んらうは、 聖年、
 氣ゆへある、 聖派、
 心あき、 浮洲、
 ものし給ふ、 文章、
 さそむむ、 聖年、
 さそむむ、 聖年、
 あやしむ、 下手ナ、
 わく、 浮世、
 浮利、
 まが、

五百志ろや、	千志ろの田のも、
ほにいでて、	雁わたるらし、
れも志ろき、	時のさかりを、
れしてゐるや、	難波のうらの、
あしのけに、	なびきこひ伏し、
飛ぶ鳥の、	翅しあらねば、
いたづらに、	せむすべをなみ、
こもりゐて、	歎かひくらし、
床のべに、	いぬるあひだに、
さにづらふ、	少女のともが、
志らたまの、	玉かつらかけ、

むらさきの、	綾ごろもきて、
こまにしき、	紐をゆひたり、
手にまける、	玉もゆらゝに、
志きたへの、	わがまくらべに、
つどひきて、	志かな歎きそ、
みめぐみの、	つゆをば受けて、
生ひたちし、	ことわすれめや、
いまよりは、	御そばさらで、
あさよひに、	わがなぐさめむ、
志るしなき、	ものなもひそと、
をとめらが、	かたらひをると、

見しいめの、 さめつゝ見れば、
 にしき綾に、 つゝめる子らは、
 ませのうちの、 つゆにあらそふ、
 秋萩の花。

一七、祭のことば

こゝに、文化の五とせ、九月八日、平春海、謹みて、芳宜園大人のれくつきの御前に、菊の初花、一枝をたむけ、香の木、一ひらをたきて、うなねづきて、申さく。あはれ、悲しきかも。君は、われに、十といひて、一とせの、このかみに、れはすなるが、今、そのかみを思ひ出づるに、君は、まさに、さかりの齡に、れはして、われ

は、まだ、童にてぞ侍りける。常に、縣居の庭に、物まなびにゆきかひたる時、朝にまゐるとしては、君の御はかしの後に従ひ、夕にまかるとしては、君の御袖のもとにすがりて、あひうるはしみまつれること、親子はらからにても、なにか、ことならむ。書よむとては、君を、師ともたふとみ、歌作るとしては、われを、れととひのつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は、つかへの道に暇なく、れはし、われは、世のさがにかゝづらひて、れのづから、疎き方にも過ぎつるを、君、つかへを退き給ひて、後は、われも、同じ衢にうつり住めば、花をたづぬとては、われ、道志るべをなし、月を思ふとては、君が舟に、あひ乗り、うきことも、ともに、うれへ、うれしきふしも、ともに、喜びて、世にありふるわざ

の、まめごと、も、あだごと、も、かたみに、へだてなく、心をかはせること、今にはたとせ。そのはじめを、くりかへし數ふれば、あひ友たること、既に、五十とせにぞあまりける。さるを、今、れくれ奉りて、いつの世にか、あひ見む。いづれの時にか、ことゝはむ。つねなきは、人の身のならひぞと知るも、これを、いかでか、歎かざらむ。かゝるを、誰かは、よく堪へむ。あはれ、悲しきかも。文の林、世々に衰へ、言の葉の道、日々に下り行けるを、賀茂の翁、世に出で、今を捨て、古にかへり、青雲の高き心、志らひを求め、まづ機の、あやなるみやびごとを、尊みいへれど、株を守り、舟にきだつくりともがら、かれになづみ、こゝにひかれて、猶、あやしみ咎むるたぐひは、はれほく、たまあひて、よく、うけひ

く、人なむ稀なりしを、君ひとり、心をれこして、あまねく、さとし、ひろく、誘ひしより、ちかき人は、まのあたり、あひうづなひ、とほき人は、はるかに、なびき來て、古ぶりの歌、世にさかりになり、にたるは、まことに、君の力によりてなり。その、みづから、よみ出で給へる歌を見るに、ふるき調、新しき姿、とりどりに、備らざるなし。その古をうつせるは、藤原、寧樂の御世に、れよび、後の巧に習へるは、堀河、鳥羽の御時に、下らず。心に思ふことは、口に盡さざる事なく、目に觸るゝものは、詞にのほせざることなむあらざりける。これを見て、高きも、短きも、愛で尊ばざる人なし。また、事ごのみ、人の名を、君に知られては、身のれもてれこしと思ひて、世にも誇り、君の一歌を得る

は、價なき寶にもかへじといひてぞ、深く喜びける。さるを、今、金の聲、忽ち止みて、玉の響、再びきこえずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大方の世人の憂ともいひつべし。これを、いかでか、惜まざらむ。かゝるを、誰かは、またはざらむ。あはれ、悲しきかも。わが、かく、ことあげするを、泉の下にも、さやかに、きこし召し、天がけりても、はるかに、みそなはせとなむ申す。(村田春海著琴後集)

一八、はれぬ雲

吉野の行宮にて、うへのをのこども、題をさぐりて、歌讀み侍りける次に、五月雨といふことを、よ

ませたまひける、

後醍醐天皇御製

都だに、さびしかりしを、くもはれぬ、

よし野のれくの、五月雨の頃、

題えらず、

後村上天皇御製

鳥のねに、れどろかされて、あかつきの、

ねざめまづかに、世を思ふ哉、

百首歌中に、

冷泉入道前右大臣

身のよそに、たち別れても、戀しきは、

みはしのはなの、昔なりけり、

羈中百首の歌に、菖蒲を、

中務卿宗良親王

あやめひく、今宵ばかりや、思ひやる、

みやこもくさの、枕なるらむ。

文貞公、あづまのかたへれもむきはべりける時、
れなじやうにくだりける人々、道にて、あまた、う
せはべりけるよし、傳へ聞きてよめる、

妙光寺内大臣母

めぐりあふ、契ならずば、なかなかに、

うきを見はてぬ、命ともがな。

勢多の橋をすぐとて、

權中納言具行

けふのみと、思ふわが身の、夢の世に、

わたるもつらし。せたの長橋。

題まらず

大藏卿在仲

故郷に、たちかへるとも、いまはまた、

むかしを語る、友やなからむ。

ある野原の中にて、夜をあかしけるに、秋の末つ
かたなれば、蟲のこゑごゑ、きほひなくを聞きて、
思ひつゞけ侍りける、

文貞公

いにしへは、つゆわけわびし、蟲の音を、

たづねぬくさの、枕にぞきく。

後醍醐天皇の御陵に、詣でたまひて、よませ給ひ
ける、

新待賢門院

さびしさも、つひのすみかと、思ふには、

て、雲霞の兵をたなびかせて、都にのぼす。泰時を前にすゑて、いふやう、れのれを、このたび都にまゐらすは、思ふところ多し。本意の如く、清き死をすべし。人に、うしろ見えなむには、親の顔、また見るべからず。今をかぎりと思へ。いやしけれども、義時、君の御ために、うしろめたき心やはある。されば、横ざまの死をせむことは、あるべからず。心をたけく、れもへ。れのれ、うち勝つものならば、二たび、この足柄、箱根はこゆべし。など、なくなく、いひきかす。まことに、去かなり。又、親の顔、をがまむ事も、いと、あやふしと思ひて、泰時も、鎧の袖を志ほる。かたみに、今やかぎり、と、あはれに、心細げなり。かくて、うち出でぬる又の日、思ひかけぬほどに、泰時、たゞひとり、鞭をあげて、馳

せきたり。父、むねうちさわぎて、「いかに」と、問ふに、「軍のあるべきやう、大かたのれきてなどは、仰のごとく、その心をえ侍りぬ。もし、道のほとりにも、はからざるに、かたじけなく、風輦を先だて、御旗をあげられ、むこうのげんぢうなる事も侍らむに、まゐりあへらば、その時の進退、いかゞ侍るべからむ。この一ことを、たづね申さむとて、ひとり、馳せ歸り侍りき」と、いふ。義時、とばかり、うち案じて、「かしこくも、問へるをのこかな。その事なり。まさに、君の御輿に向ひて、弓をひくことは、いかがあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりて、ひとへにかしこまりを申して、身をまかせたてまつるべし。さはあらで、君は、都にれはしましなから、軍兵をたまはせば、命を捨

て、千人が一人になるまでも、戦ふべし」といひもはてぬに、いそぎ立ちにけり。

都にも、れほしまうけつる事なれば、ものゝふども、召しつどへ、宇治、勢多の橋もひかせて、かたきを防ぐべき用意、ことなり。公經の大將ひとりのみ、御うまごのことも、さる事にて、北の方、一條中納言能保といふ人のむすめなり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一かたならず、あづまを重くれほして、さしいらへもせず、院の御心の輕き事と、あぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信、尾張中將清經、中御門大納言宗家、又、修明門院の御はらからの、甲斐の宰相中將範茂など、つきつき、あまたきこゆれど、さのみは

記しがたし。いくさにまじりたつ人々、この外の上達部にも、殿上人にも、あまたありき。

御修法ども、數まらず、行はる。やんごとなき顯密の高僧も、かゝる時こそ、たのもしきわざならめ。れのれの、心をいたして、つかうまつる。御みづからも、いみじう、ねんぜさせ給ふ。日吉の社に、忍びて、詣てさせ給へり。大宮の御まへに、夜もすがら、御念誦ま給ひて、御心のうちに、いかめしき願どもを立てさせ給ふ。夜すこし、ふけ靜りて、御社、すぐく、燈籠の光、かすかなるほどに、幼き童の臥したりけるが、俄に、れびえあがりて、院の御前に、たいまゐりに、はしりまゐりて、託宣しけり。かたじけなくも、かく、わたりれはしまして、うれへ給へば、聞きす

ごしがたく侍れど、一とせの御輿ぶりの時、なさけなく、防が
せ給ひしかば、衆徒、れのれを恨みて、陣のほとりに、ふりすて
侍りしかば、むなしく、馬牛のひづめにかゝりし事は、今に、怨
めしく、思ひ給ふるにより、このたびの御方人は、えつかうま
つり侍るまじ。七社の神殿を、こがねまろがねに、みがきなさ
むと、うけたまはるも、はら、承け侍らぬなり」と、のゝしりて、
息も絶えぬるさまにて、伏しぬ。きこしめす御心ち、物に似ず、
あさましうれほさるゝに、たゞ、御涙のみぞいで來る。過ぎに
しかた、くやしう、とりかへさまほし。さまさま、怠りかしこま
り申させ給ふ。山の御輿、防ぎたてまつりけむこと、かならず
しも、御みづから、れほしよるには、あらざりけめど、責、一人に

と、いふらむ事にやと、あぢきなし。中院は、あかて、位をすべり
給ひしより、言にいでてこそものしたまはねど、世の、いと、心
やましきまゝに、かやうの御さわぎにも、殊に、まじらひたま
はざめり。新院は、れなじ御心にて、よろづ、いくさの事なども、
掟てれほせられけり。

二〇、新島守その二

いつのとしよりも、五月雨は、れまなく、富士川、天龍など、え
もいはず、漲りさわぎで、いかなる龍馬も、うちわたしがたけ
れば、攻めのほる武者ども、あやしく、なやめり。かゝれども、
遂に、都にちかづくよし、きこゆれば、君の御武者も、いでたつ。

その勢、六萬餘騎とかや。宇治、勢多へ分ちつかはす。世の中、ひびきの、しるさま、言の葉もれよばず、まねびがたし。あるは、ふかき山へ逃げこもり、とほき世界に落ちくだり、すべて、やすげなく、騒ぎみちたり。いかゝあらむと、君も、御心みだれて、れほしまどふ。かねては、たけく見えし人々も、誠のきはになりぬれば、いと、心あわたしく、色を失ひたるさまども、たのもしげなし。六月廿日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂に、みかたのいくさ、やぶれぬ。あら磯に、たか潮などの、さしくるやうにて、泰時と、時房と、みだれ入りぬれば、いはむかたなくあきれて、上下、たゞ、物にぞあたりまどふ。

からひれきてつゝ、保元のためしにや、院の上、都の外に遷し、たてまつるべしときこゆれば、女院、宮々、所々に、れほしまどふ事、さらなり。本院は、隱岐國に、はしますべければ、まづ、鳥羽殿へ、網代車の、あやしげなるにて、七月六日、いらせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましう、あはれなり。ものにも、がなやと、れほさるゝも、かひなし。その日、やがて、御ぐしれるす。御とし、四そぢに、一つ二つや、あまらせ給ふならむ。まだ、いと、をしかるべき御ほどなり。信實朝臣召して、御すがた、うつしかゝせらる。七條院へ、たてまつらせ給はむとなり。かくて、れなじ十三日に、御舟に、たてまつりて、遙なる波路を、志のぎれはします御心ち、この世の同じ御身とも、れほされず。いにし

へ、いかなりける。代々の報にかと、うらめしく、新院も、佐渡國に遷らせ給ふ。まことや、七月九日、帝仲恭天皇をも、おろしたてまつりき。この卯月かとよ、御讓位とて、めでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて、おろし給へるためしも、これや始なるらむ。もろこしにぞ、四十五日とかや、位にれはする例ありけるとぞ、からのふみ讀みし人の、いひし心ちする。それも、かやうの亂やありけむ。さて、上達部、殿上人、それより下、はた、残るなく、この事に觸れにしたぐひは、重く、軽く、罪にあたるさま、いみじげなり。中院は、はじめより、おろしめさぬ事なれば、あづまにも、とがめ申さねど、父の院、遙に、うつらせ給ひぬるに、のどかにて、都にあらむ事、いと、おろしありと、おろしされて、御心

もて、その年閏十月十日、土佐國の幡多ハタといふ處にわたらせ給ひぬ。去年のきさらぎばかりにや、わか宮、いでき給へり。承明門院の御せうとに、通宗の宰相中將とて、若くてうせ給ひにし人のむすめの御はらなり。やがて、かの宰相のれとうとに、通方といふ人の家に、とゞめたてまつり給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ、御とも、つかうまつりける。いと、あやしき御手輿にて、くだらせ給ふ。みちすがら、雪かきくらし、風ふきあれ、ふゞきして、來しかた、ゆくさきも見えず、いと、堪へがたきに、御袖も、いたく、こほりて、わりなきこと、多かるに、

浮世には、かゝれとてこそ、生れけめ。

ことわり知らぬ、わがなみだかな。

「せめて、近き程に」とあづまより奏したりければ、後には、阿波國に遷らせ給ひき。

さて、このたび、世の有様、げに、いと、うたて、くちをしきわざなり。あるは、父の王をうしなふためしだに、一萬八千人までありけり」とこそ、佛も説き給ひためれ。まして、世くだりてのち、もろこしにも、日の本にも、争ひて、戦をなすこと、數へつくすべからず。それも、皆、ひとふし、二ふし、のよせはありけむ。もしは、すぢことなる大臣、さらでも、れほやけともなるべききざみの、すこしのたがひめに、世にへだたりて、その恨のすゑなどより、事れこるなりけり。今のやうに、むげの民とあらそ

ひて、君のほろび給へるためし、この國には、いと、あまたも、聞えざめり。されば、承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも、皆、たけかりけれど、宣旨には、勝たざりき。保元に、崇徳院の世を亂り給ひしだに、故院後白河院の御位にて、うちかち給ひしかば、あまてらす大御神も、御裳、濯川のれなじ流と申しながら、なほ、時のみかどを守りたまはすることは、つよきなめりとぞ、ふるき人々も聞えし。又、信賴の衛門督、れほけなく、二條院をれびやかしたてまつりしも、遂に、空しき屍をぞ、道のほとりに、棄てられける。かゝれば、ふりにし事を思ふにも、猶さりととも、いかでか、三皇、今上、あまた、れはします王城の、徒に、ほるふるやうやはあらむと、たのもしくこそ、れほえしにかく、

いとあやなきわざの出できぬるはこの世一つのことにも
あらざらめどもまよひのれろかなるまへには猶いとあや
しかし四つにて位につき給ひて十五年はしましき。れり
給ひて後も土佐院十二年佐渡院十一年なほ天の下には、れ
なじ事なりしかばすべて三十八年が程この國のあるじと
して萬機のまつりごとを御心ひとつにをさめ百の官をま
たがへ給へりし。そのほど吹く風の草木をなびかすよりも
まされる御ありさまにて遠きをあはれみ近きをなで給ふ
御めぐみ雨の脚よりもまげければ津の國のこやのひまな
きまつりごとをきこしめすにも難波のあしの亂れざらむ
ことをれほしき。藐姑射の山の峯の松もやうやう枝をつら

ねて千代に八千代をかさね霞のほらの御住居いく春をへ
てもそらゆく月日のかぎりまらずのどけくれはしましぬ
べかりける世をありありてよしなき一ふしに今はかく花
の都をさへたちわかれ。れのがちりぢりにさすらへ磯のと
まやに軒をならべて。れのづからことゝふものとしては浦に
つりするあま小舟。まほやく烟のなびくかたをもわがふる
郷の志るべかとばかりながめすごさせ給ふ御すまひども
はそれまでと月日をかぎりたらむだにあすまらぬ世のう
しろめたさにいと心ほそかるべし。ましていつをはてとか
廻りあふべきかぎりだになく雲の浪けぶりの浪のいくへ
ともまらぬ境に世を過し給ふべき御さまども口惜しとい

ふも、れるかなり。

一一一、新島守 その三

このれはします處は、人ばなれ、里遠き志まの中なり。海づ
 らよりは、すこし、ひき入りて、山かげにかたそへて、大きやか
 なるいはほの、そはだてるを、たよりにて、松の柱に、あしふけ
 る廊など、けしきばかり、ことそぎたり。まことに、柴のいほり
 の、たゞ、志ばしと、かりそめに見えたる、御やどりなれど、さる
 かたに、なまめかしく、ゆゑづきて、志なさせ給へり。水無瀬殿
 れほし出づるも、夢のやうになむ。はるばると見やらるゝ海
 の眺望、二千里の外も、のこりなき心ちする、今さらめきたり、

志ほ風のいと、こちたく、吹き來るを、きこしめして、

われこそは、新島もりよ。れきの海の、

あらしなみかぜ、こゝろして吹け。

同じ世に、またすみのえの、月や見む。

けふこそよそに、れきの志まもり。

年も歸りぬ。所々、うらうら、あはれなることをのみれほし

なげく。佐渡院あけくれ、御行をのみ志給ひつゝ、猶、さりとも

とれほさる。隠岐には、浦よりをちの、はるばると、霞みわたれ

るそらを、ながめ入りて、過ぎにし方、かきつくし、れもほしい

づるに、ゆくへなき御涙のみぞ、とゞまらぬ。

うらやまし。長き日影の、春にあひて、

ワラシキ入
 心カ
 心カ
 ト

昔の秋も雨の後の
沖の乾かす海を
みよるかすかす

志ほ汲むあまも、そてやほすらむ。

夏になりて、かやぶきの軒端に、五月雨の志づく、いと、ところ
せきも、御覽じなれぬ御心ちに、さまかはりて、めづらしく、お
ぼさる。

あやめふく、萱が軒端に、風過ぎて、

志どろにれつる、むらさめの露。

はつ秋風のたちて、世の中、いと、ものがなしく、露けさまさ
るに、いはむかたなく、おぼしみたる。

故郷を、わかれ路にれふる、葛の葉の、

あきは來れども、かへる世もなし。
たとしへなく、ながめ志をれさせ給へるゆふぐれに、沖のか

わかすしあつたう、せり
しそあつとあふし、
まうらそつたう、せり

たに、いと、ちひさき木の葉のうかべると見えて、漕ぎくるを、
あまの釣舟かと御覽するほどに、都よりの御せうそこなり
けり。墨染の御ころも、夜の御ふすまなど、都の夜さむに、思ひ
やりきこえさせ給ひて、七條院より參れる、御ふみ、ひきあけ
させ給ふより、いと、いみじく、御むねもせきあぐる心ちすれ
ば、やゝ、ためらひて、見給ふに、あさましくも、かくて、月日へに
ける事、けふあすとも志らぬ、命のうち、今一たび、いかで、見
たてまつりてしがな。かくながらは、死出の山路も、こえやる
べうも侍らでなむなど、いと、おほく、みだれがき給へるを、御
かほに、れしあてゝ、

垂乳根の消えやらで待つ、露の身を、

毎朝、あまの、あまの、あまの
あまの、あまの、あまの
あまの、あまの、あまの

水無瀬山、わが故里は、あれぬらむ。

まがきは野らと、人もかよはで、

かざしをる、人もあらばや、言とはむ。

れきのみやまに、杉はみゆれど、

限あれば、さてもたへける、身のうさよ。

民のわらやに、のきをならべて、

(増鏡)

訂正中等國語讀本卷十終

明治三十六年十一月廿四日訂正二十六版印刷
明治三十六年十一月廿七日訂正二十六版發行
明治三十七年十二月廿五日三十五版印刷發行

訂正中等國語讀本與附
定價表
一ヨリ各金貳拾六錢
十マテ附録國文學史金參拾錢

明治三十六年十一月廿四日訂正二十六版印刷
文部省檢定
（中學校國語科用）



著者 落合直文

發行者 三樹一平
東京市神田區錦町一丁目十番地

印刷者 鈴木友三郎
東京市神田區三河町二丁目十六番地

印刷所 宮本印刷所
東京市神田區雜子町三十四番地

發行所 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目
電話本局 二四三八番
大阪市東區備後町四丁目
特電話東四三番

明治書院
岡平助

